



2040年の科学・学術と社会を 見据えていま取り組むべき10の課題

岩崎 渉

日本学術会議若手アカデミー 前代表・東京大学 教授

若手アカデミー

若手アカデミーについて

代表からのメッセージ

20年後の科学・学術と社会を見据えたりモデリング戦略を考える

日本学術会議若手アカデミー（Young Academy of Japan）は、人文・社会科学と自然科学にまたがる多様な分野において、最先端の研究に取り組む45歳未満の研究者をメンバーとしています。確固たる専門性と多様な背景を特徴とするユニークな組織として、未来の科学・学術を担う若手研究者の立場から、幅広い活動を行っています。その大きなミッションは、研究者コミュニティのみならず政府・産業界・メディア・国民や諸外国の若手アカデミーとも対話・連携することで、世界や日本が直面する諸問題、また、若手研究者をとりまく諸問題に関する解決策を提示し、実行していくことです。



代表 岩崎 渉
 東京大学大学院
 新領域創成科学研究科教授



副代表 安田 仁奈
 宮崎大学農学部
 准教授



幹事 小野 悠
 豊橋技術科学大学
 大学院工学研究科講師



幹事 松中学
 名古屋大学大学院
 法学研究科教授

若手アカデミーの最近の動き

- 公開ワークショップ「若手科学者が拓く地域と科学の関係」を開催しました。（令和3年3月1日）（PDF形式：406KB） 

▶ 若手アカデミー

若手アカデミーについて

若手アカデミーの最近の動き

若手アカデミーからの発信

> 「学術の動向」

> 「若手アカデミーの推薦図書」

過去の主要な活動等

規則

組織

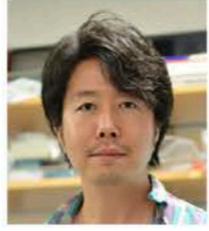
構成員

若手アカデミー会議開催状況

構成員名簿及び研究紹介

リンク1: researchmap リンク2: 外部リンク

							
石川 麻乃	今田 晋亮	入江 直樹	岩崎 渉	岩永 理恵	岩村 誠	上村 想太郎	遠藤 求
東京大学・准教授	東京大学・教授	統合進化科学研究センター・教授	東京大学・教授	日本女子大学社会福祉学科・教授	NTTセキュリティ・ジャパン株式会社・特別研究員	東京大学・教授	奈良先端科学技術大学・教授
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2
							
遠藤 良輔	小野 悠	笠井 久会	加藤 千尋	川口 慎介	岸村 顕広	木村 草太	小森 大輔
大阪府立大学・講師	豊橋技術科学大学・准教授	北海道大学・准教授	弘前大学・准教授	海洋研究開発機構・主任研究員	九州大学・准教授	東京都立大学・教授	東北大学グリーン未来創造機構・特任教授
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2
							
近藤 康久	坂井 南美	笹倉 香奈	實藤 和佳子	新宅 博文	新福 洋子	相馬 雅代	田井 明
総合地球環境学研究所・准教授	理化学研究所・主任研究員	甲南大学・教授	九州大学・准教授	京都大学医生物学研究所・教授	広島大学・教授	北海道大学・准教授	福岡工業大学社会環境学部・准教授
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2

							
高瀬 堅吉	高田 知実	高槻 泰郎	武田 宙也	竹村 仁美	田中 和哉	土屋 太祐	寺田 佐恵子
中央大学・教授	神戸大学・教授	神戸大学・准教授	京都大学・准教授	一橋大学・教授	政策研究大学・リサーチ・フェロー	新潟大学・准教授	玉川大学・講師
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2
							
遠野 雅徳	富永 依里子	中島 裕美子	中西 和嘉	西嶋 一欽	埴淵 知哉	平田 佐智子	藤岡 沙都子
農業・食品産業技術総合研究機構・主任研究員	広島大学・准教授	東京工業大学物質理工学院応用化学系・教授	物質・材料研究機構・主幹研究員	京都大学防災研究所准教授	京都大学大学院文学研究科・准教授		慶應義塾大学・准教授
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2
							
前川 知樹	松中 学	南澤 孝太	森 章	安田 仁奈	谷内江 望	山川 みやえ	山田 あすか
新潟大学・准教授	名古屋大学・教授	慶應義塾大学・教授	東京大学・教授	東京大学・教授	東京大学・准教授	大阪大学・准教授	東京電機大学・教授
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2
							
吉永 直子	標葉 隆馬	江端 新吾					
京都大学・助教	大阪大学・准教授	東京工業大学教授					
リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2	リンク1 → リンク2					

45歳以下の若手研究者
多様な分野・地域・属性の51名



若手アカデミー設立の背景（1）

分野横断的な若手研究者の声の重要性：欧州での認識

- 1994年 欧州アカデミー協会（ALLEA）設立、
European Young Academyの立ち上げを目指す
→2012年設立
- 2000年 ドイツ若手アカデミー設立
- 2005年 オランダ若手アカデミー設立



若手アカデミー設立の背景 (2)

若手研究者の声の重要性：セクターや国を越えた認識

- 世界経済フォーラム
 - 2008年、2009年サマードボス会議における、社会および科学における若手科学者の役割の議論
- インターアカデミーパートナーシップ (IAP)
 - 2009年、欧州各国の若手アカデミーの活動の紹介

(1) 若手アカデミー内での議論

分科会名	活動目的・内容	状況
地域活性化に向けた社会連携分科会	現在国内外の社会経済状況が大きく変化する中、科学と地域社会との関係性が問い直されている。社会課題の解決に科学の知識や手法が有効であるだけでなく、科学する場としての地域社会、科学への市民の参加が見直されている。地域社会における科学者の役割を幅広く検討し、多様な主体との対話を重ねることで、科学と地域社会の持続的な関係性を再定義し、実現方策を検討する。	第1回 R3 1月19日 R3 3月1日公開ワークショップ「若手科学者が拓く地域と科学の関係」 第2回 R3 6月2日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 3月25日 第5回 R4 8月23日
学術界の業界体質改善分科会	研究従事時間の減少とそれ以外の業務の増加が指摘されるなか、研究に集中できる環境整備と健全なライフ・ワーク・バランスの確立は、重要な課題である。学会活動にかかる時間的負担やその他の慣例的な業務負担など、学術界の様々な「業界体質」を可視化し、その改善に向けた調査・議論を進める。	第1回 R3 2月12日 第2回 R3 11月22日 第3回 R4 9月20日 第4回 R5 (1月予定)
イノベーションに向けた社会連携分科会	第25期若手アカデミービジョン・ミッションを共有し、「イノベーション」の概念整理に着手している。現時点で優先すべきイノベーション、イノベーションを起こすために必要なもの、イノベーションを阻むものについて議論する。今後、シンポジウムをし、広く市民との意見交換の場を持つとともに、関係団体と意見交換を行い、議論の内容を意思の表出へとつなげる。	第1回 R3 2月22日 第2回 R3 4月16日 第3回 R3 11月16日 第4回 R3 12月10日 第5回 R4 1月18日 第6回 R4 3月23日 第7回 R4 5月30日
情報発信分科会	若手アカデミーの活動を促進し、その有効性を高めるために、情報発信の媒体や方法を議論し、実践する。国内のアカデミアとその周辺に限定せず幅広い利害関係者をステークホルダーと捉え、若手アカデミーに関する理解や認識を得ながら対話し、双方向的なコミュニケーション活動を目指す。	第1回 R3 4月15日 第2回 R3 7月12日 第3回 R3 12月10日

(1) 若手アカデミー内での議論

分科会名	活動目的・内容	状況
学術の未来を担う人材育成分科会	大学院において専門教育を受けた多様な人材を活かすべく、高等教育が担う教養教育・専門教育の社会的価値を多角的に評価するための調査・議論を進める。また、大学院生が効果的な教育を受け研究に専心できる環境を構築するための調査・議論や精神的・経済的な環境に対して支援する枠組みのあり方について検討をおこなう。	第1回 R3 2月17日 第2回 R3 11月22日 第3回 R3 12月10日 第3回 R4 11月22日
越境する若手科学者分科会	幅広い専門分野を持つ若手科学者間の研究交流を図り、既存の発想にとられない科学分野間の融合によって革新的な研究展開が生じうる新規領域やそれらが生む未来社会のビジョンの提案、新しいテクノロジー等を用いた市民との交流の実践を行う。	第1回 R3 2月26日 研究交流会5回 第2回 R3 5月18日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 10月26日
GYA 総会国内組織分科会	国際的若手学術組織であるグローバルヤングアカデミー(GYA)と共に、科学技術の未来や世界規模の社会課題の解決を考えるGYA総会兼学会を日本でする。GYA共同代表、執行役員およびメンバーで構成される企画組織委員会と連携し、企画内容および登壇者の提案や国内的な準備を行い、かつ若手アカデミー以外の若手研究者や若手以外の研究者、行政官、産業界、一般市民も参加できる議論の場を設定できるよう連絡調整を行う。	第1回 R3 1月21日 第2回 R3 3月12日 第3回 R3 6月17日 第4回 R3 10月8日 第5回 R4 1月5日 第6回 R4 6月1日 第7回 R4 8月25日
国際分科会	世界における日本の学術の役割や、世界におけるわが国の学術をどのように進めていくべきかについて、若手科学者の立場から考える。既に関係の深い国際的若手学術組織であるGYAへの参画を通じ、他国の若手アカデミーとの交流を深め、また我が国との交流連携を深めるとともに、他国のアカデミーと共同して国際的発信を行う。	第1回 R3 2月15日 第2回 R3 3月24日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 12月28日予定

● ● ●

日本学術会議 公開シンポジウム

若手研究者をとりまく評価

調査結果報告と論点整理

世界的な競争、評価をめぐる問題、キャリアパスに関する課題など、若手研究者をめぐる研究・知識生産の環境は多くの課題を抱えています。安定的な活動基盤の獲得のために、時にチャレンジングな研究の回避、あるいは評価指標を過度に気にした活動などの弊害が指摘され、知識生産の可能性を損ねていくことが危惧されています。

日本学術会議若手アカデミーでは、「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」を実施し、全国の多くの若手研究者から回答を得ました。本シンポジウムでは意識調査の結果を報告するとともに、若手研究者をめぐる評価のあり方について幅広い視点から議論し、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に向けた論点整理を行います。

プログラム

13:00-13:20
開会挨拶 岩崎 渉 東京大学・教授
趣旨説明 小野 悠 豊橋技術科学大学・准教授

13:20-13:50 報告
「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」結果報告
標葉 隆馬 大阪大学・准教授

13:50-15:20 パネルディスカッション
経営学からみる若手研究者評価
服部 泰宏 神戸大学・准教授

研究環境からみる若手研究者評価
江端 新吾 東京工業大学・教授、内閣府・上席科学技術政策フェロー

ライフプラン・キャリアパスからみる若手研究者評価
加藤 千尋 弘前大学・准教授

産官学人材流動からみる若手研究者評価
塚本 直樹 富士フイルム株式会社・技術マネージャー

国際からみる若手研究者評価
新福 洋子 広島大学・教授

コーディネーター：
岸村 顕広 九州大学・准教授
近藤 康久 総合地球環境学研究所・准教授

15:20
閉会挨拶 望月 眞弓 慶應義塾大学・名誉教授

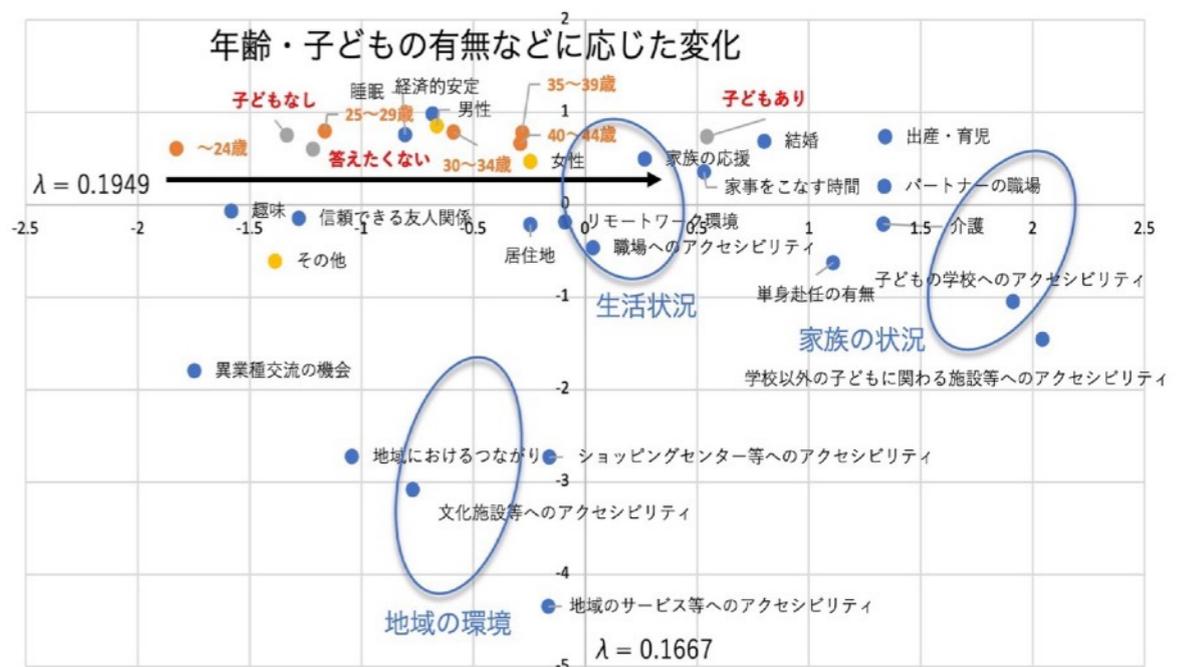
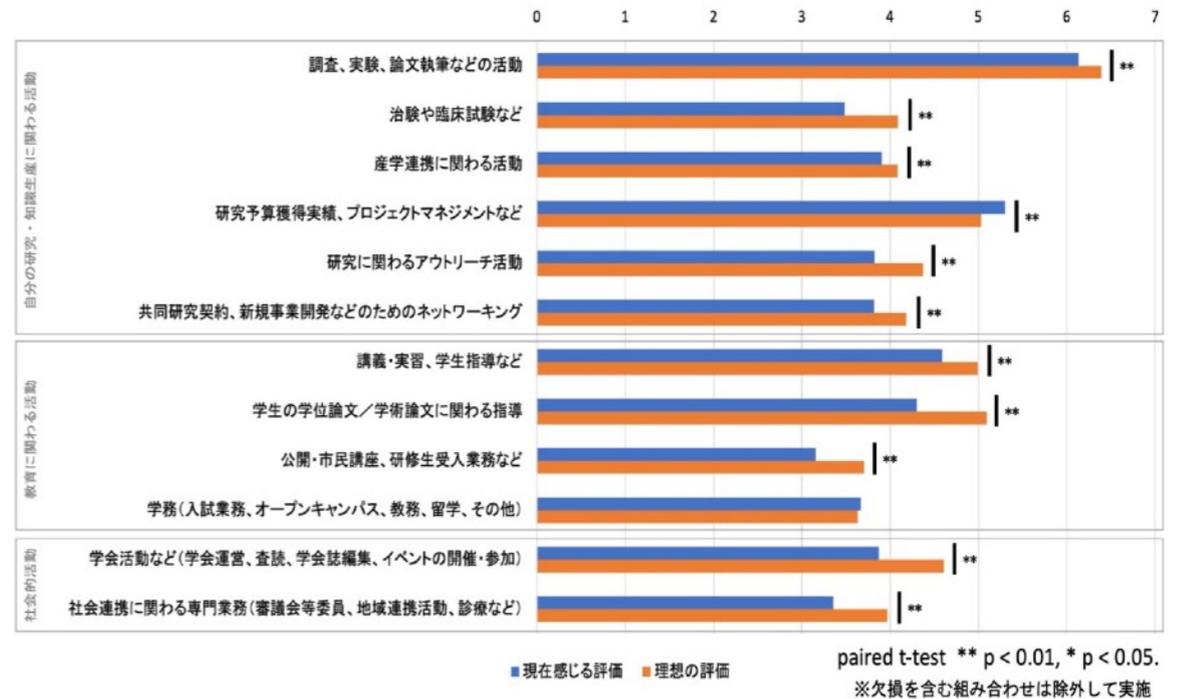
オンライン開催

2022年10月6日(木)
13:00 ~ 15:30

こちらからご登録ください▼



主催：日本学術会議若手アカデミー、若手アカデミー地域活性化に向けた社会連携分科会



(2) さらに幅広い若手研究者の意見の取り込み

那須地域から考える20年後の日本社会
共領域におけるイノベーション創出と地方創生

2022年9月5日(月) 14時～17時

那須ハイランドパークイVENT館
(栃木県那須郡那須町高久乙3375)

14:00 開会の挨拶と趣旨説明

加藤 千尋 (日本学術会議若手アカデミー会員・弘前大学准教授)

14:10～15:30 第1部 話題提供

八木澤 玲玖 (株式会社那須旅代表取締役社長)

留目 真伸 (一般社団法人ナスコンバレー協議会理事・SUNDRE株式会社代表取締役)

井上 高志 (一般社団法人ナスコンバレー協議会代表理事・株式会社LIFULL代表取締役社長)

木村 草太 (日本学術会議若手アカデミー会員・東京都立大学教授)

小野 悠 (日本学術会議若手アカデミー幹事・豊橋技術科学大学准教授)

15:50～16:50 第2部 パネルディスカッション

ファシリテーター:

寺田 佐恵子 (日本学術会議若手アカデミー会員・玉川大学講師)

パネリスト:

第1部話題提供者

柿沼 緑 (日本放送協会) ほか

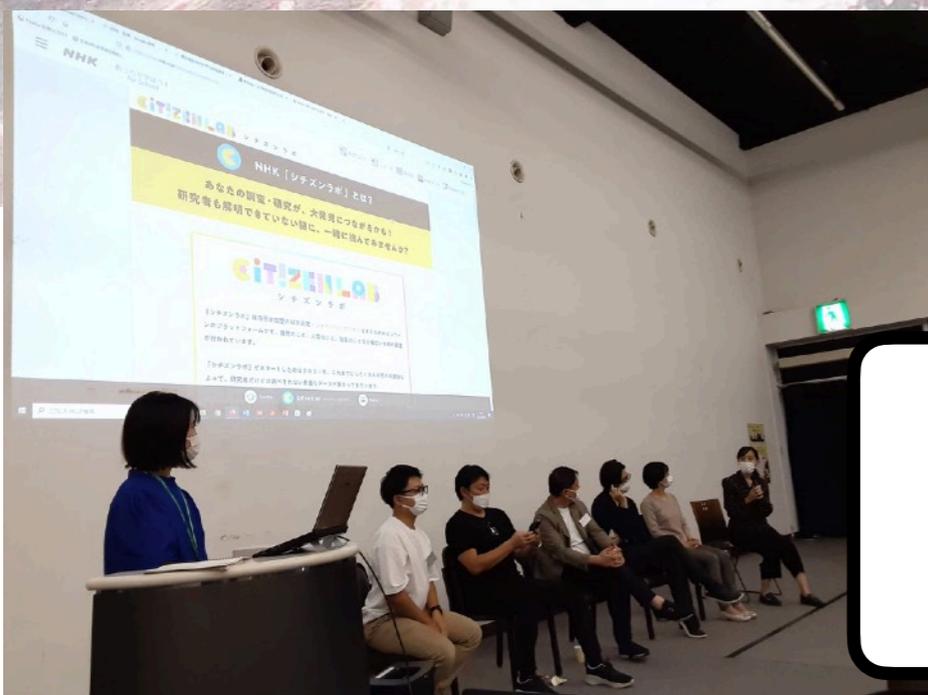
16:50 閉会の挨拶

岩崎 渉 (日本学術会議若手アカデミー代表ほ東京大学教授)

本シンポジウムでは、那須地域が抱える社会課題の解決のために展開されている「ナスコンバレー」の取組を紹介し、地方創生について専門家を招いて議論します。ぜひご参加ください。

参加費無料・予約不要

主催：日本学術会議若手アカデミー
共催：ナスコンバレー協議会
問い合わせ：公開シンポジウム事務局
tksknkch@yahoo.co.jp



(3) 地域の当事者とイノベーション
アクセラレーターの意見の取り込み

小正 瑞季 (一社) SPACE FOODSPHERE、リアルテックホールディングス (株)
地球と宇宙の食の課題解決を目指す共創プログラム

東樹 宏和 京都大学、サンリット・シードリングス (株)
宇宙船地球号と持続可能な生態系

内井 喜美子 大阪大谷大学
環境DNAによる生物多様性観測と自然共生社会実現への道

朝田 将 国土交通省水管理・国土保全局
水と緑、人とまちの、つながりの再構築に向けて

三牧 浩也 柏の葉アーバンデザインセンター
機能や主体が混ざり合うより自由な都市へ

小野 悠 豊橋技術科学大学
つくられる都市からつくる都市へ

岡 祐輔 糸島市企画部経営戦略課
地域の寛容性が未来をつくる



日本学術会議 公開シンポジウム

2022年3月1日 (火) 13:00 ~ 17:00

オンライン開催 事前にこちらからご登録ください ▶



主催 | 日本学術会議 若手アカデミー 越境する若手科学者分科会、土木工学・建築学委員会 感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会、気候変動と国土分科会、都市・地域デザインの多様なアプローチ分科会、環境学委員会・統合生物学委員会合同 自然環境分科会、統合生物学委員会・基礎生物学委員会合同 生態科学分科会、農学委員会 農業生産環境工学分科会

縮退時代において、 20年後のまち・社会を考える



(4) 課題解決のための
越境研究の実践

第12回 グローバルヤングアカデミー総会・学会

HOME 開催概要 協賛・後援・広告・
ご挨拶 Program Registration 参加者へのご案内 市民公開講座 アート作品 寄付金情報 リンク



**(5) 世界の若手
研究者との議論**

感性と理性のリバランス：
包括性と持続性に向けた科学の再生

2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題

見解

2040年の科学・学術と社会を見据えて
いま取り組むべき10の課題



令和5年(2023年)9月28日

日本学術会議

若手アカデミー

5つのポイント：

1. 現場の若手研究者のニーズ
2. 分野横断的かつ多角的な議論
3. 網羅的かつ10点に絞る
4. 公式文書として決定版
5. 引用文献やデータも充実

2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題

英語版抄録

8/3毎日新聞

10/6日刊工業新聞

Advisory Opinion

Remodeling science and society for the next 20 years:
Ten recommendations from Young Academy of Japan



Young Academy of Japan, Science Council of Japan
Sep 28th 2023

毎日新聞 2023年(令和5年)8月3日(木) 13版 科学 14

科学の森

科学と社会 より良い関係を

科学や学術は、どうしたらもっと社会の役に立つか。日本学術会議の43歳未満の研究者でつくる「若手アカデミー」が提言をまとめた。現役バリバリの研究者たちは何を思い、どのような未来を志すのか。

学術会議の若手、10の提言

「若手アカデミー」は、学術界の未来を担う若手研究者の代表として、日本学術会議の43歳未満の研究者でつくる「若手アカデミー」が提言をまとめた。現役バリバリの研究者たちは何を思い、どのような未来を志すのか。

- ① 基礎的・広域的分野における知識や技術の蓄積
- ② 基礎研究や地域課題に対する評価や支援の拡充
- ③ 博士号取得者を擁するコアファンダーの充実
- ④ セクターを越えた共創プラットフォームの整備
- ⑤ 競争的資金を活用するための基礎的経費の拡充と研究支援人材の確保
- ⑥ 科学技術外交に資するキャリアパスの整備
- ⑦ 高度な経営的視点や失敗を許さない特別職務主義からの脱却
- ⑧ 教育費の設計負担の軽減
- ⑨ アカデミア自身の「業界体質」の改善
- ⑩ 博士号取得者のセクターを越えた活用とジョブ型雇用の推進



日刊工業新聞 10月6日(金曜日) 2023年(令和5年)

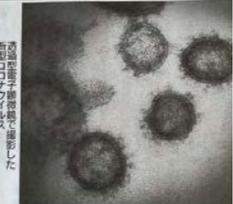
日本学術会議から 社会へ提言

学術の未来を探る

40年に向けた10の課題

ワーク過剰“体質改善”を

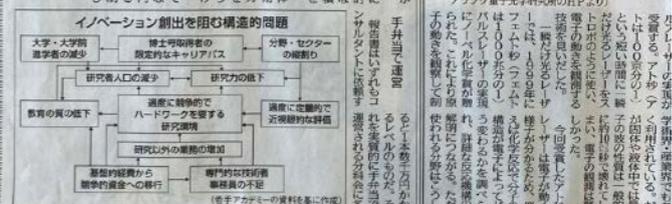
科学技術・大学



mRNA ワクチン



コロナ



インノベーション創出を阻む構造的課題

- 大学・大学院 博士号取得者の減少
- 博士号取得者の減少 研究力の低下
- 研究力の低下 競争的資金の減少
- 競争的資金の減少 基礎的経費からの移行
- 基礎的経費からの移行 競争的資金への移行
- 競争的資金への移行 競争的資金の減少

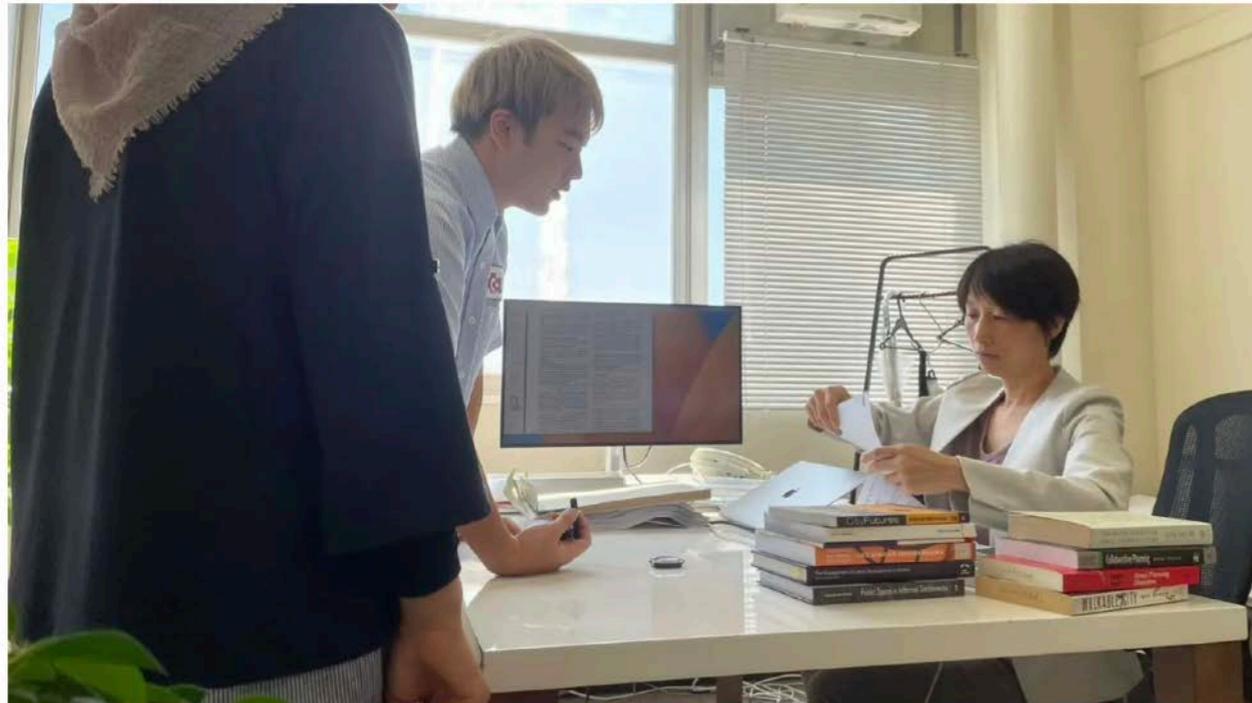


2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題

10/7 Yahooニュース

「研究時間は全体の1割」日本の若手研究者が直面する、厳しすぎる現状

市川衛  エキスパート | 医療の「翻訳家」
10/7(土) 9:01



日本の若手研究者は書類作業、社会サービスなどに忙殺されている 写真：小野悠さん

10/25 Nature

nature

[Explore content](#) [About the journal](#) [Publish with us](#) [Subscribe](#)

[nature](#) > [news](#) > [article](#)

NEWS | 25 October 2023

Japanese research is no longer world class – here's why

Despite a strong workforce, Japan's research continues to slide down the indicators of quality.

[Anna Ikarashi](#)



2040年の科学・学術と社会を見据えて

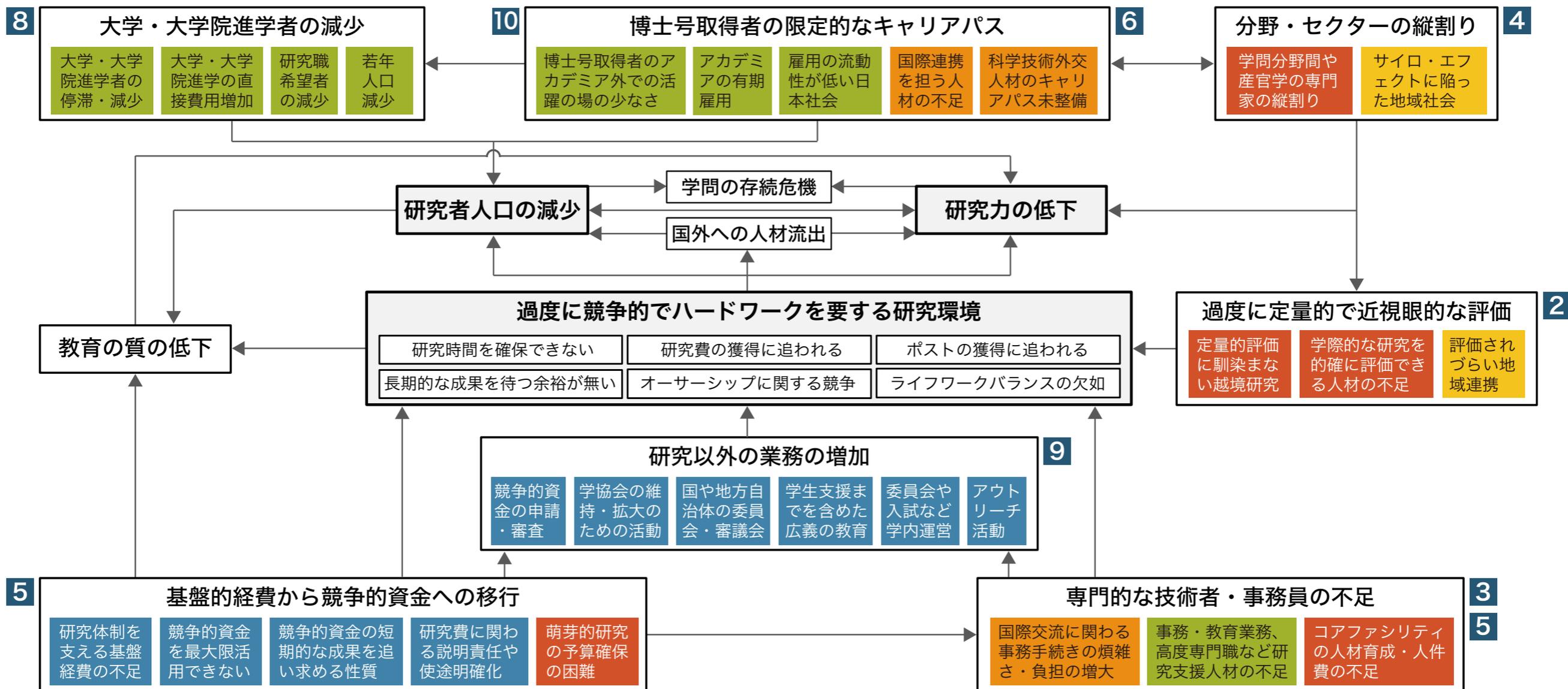
- 近い未来、65歳以上の人口が全人口の約35%に
- 労働力不足や医療・介護需要の増大、地方の過疎化、さらなる国際的な地位の低下なども確実
- 継続的な我が国からのイノベーションの創出が必須
- しかし、我が国にはイノベーション創出を阻む多数の構造的要因あり
- 環境を整えてからイノベーションが起こるには10年以上かかる
- 産官学民や分野を越えた取り組みがますます必要な「10の課題」をまとめた



イノベーション創出のために
取り組みが必要な5つの領域

日本からイノベーションを創出していくために分野や垣根を越えて共に協力していきましょう！

イノベーション創出を阻む構造的問題



■ 越境研究に関わる現状・課題

■ 越境研究に関わる現状・課題

■ 地域連携に関わる現状・課題

■ 人材・キャリアパスに関わる現状・課題

■ 研究環境・業界体質に関わる現状・課題

イノベーション創出のためにいま取り組むべき10の課題

1 基盤的・伝統的分野における知識や技術の蓄積

基盤的・伝統的分野における知識と技術の蓄積こそが我が国の学術研究の根底をなす豊かな土壌であり、その維持と発展が決定的に重要である。

2 越境研究や地域連携に対する評価や支援の拡充

学際的な越境研究や、地域課題を解決するための学術活動を長期的な時間スケールで的確に評価するシステムの確立や、ポストや予算のさらなる措置が急務である。

3 博士号取得者を擁するコアファシリティの拡充

業務過多の中でも多様な人材が活躍し、重要な研究課題に集中するために、諸外国と同様に高度な技術者を擁するコアファシリティの拡充が急務である。

4 セクターを越えた共創プラットフォームの整備

アカデミアが産業界・行政・地域社会と連携し、力を合わせて重要な領域横断的課題を解決するとともに、連携できる人材を育成する共創の場の整備が急務である。

5 競争的資金を活用するための基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強

基盤的な経費や人材の不足により競争的資金を十分に活用できていない本末転倒な状況を改善するために、基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強が急務である。

6 科学技術外交に関わるキャリアパスの整備

科学・学術分野における我が国の国際連携力を根本から強化する人材として、科学技術外交を担うことが出来る人材の育成とそのキャリアパスの整備が急務である。

7 過度な経営的視点や失敗を許さない前例踏襲主義からの脱却

0から1を創り出すイノベーションを支えるため、経営的な視点に依存しすぎた研究費などのリソース配分を改め、失敗を許容する予算配分や運営を行うことが急務である。

8 教育費の家計負担の低減

大学院生の減少を食い止め、イノベーション人材を供給していくための最も効果的なアプローチとして、教育費の家計負担をさらに減らすことが急務である。

9 アカデミア自身の“業界体質”の改善

ハードワークを美德とする業界体質を改善し、活動の本質を明確にした上で、自己目的化した活動をアカデミア自らが改善していくことが急務である。

10 博士号取得者のセクターを越えた活用とジョブ型雇用の推進

多様なセクターでの高度専門人材の活用を推進し、雇用の流動性を高めること、そのためのジョブ型雇用の推進が急務である。